

掲 示 板

* 研修実施報告 ⑤ *

～ロジカル・コミュニケーション研修～

「ロジカル・コミュニケーション研修」とは、聞き慣れない名前ですが、直感に頼らず、迅速に意思決定を行うための論理思考や論理的コミュニケーションの習得を目的とした研修です。

講師である日本経営協会客員講師の岡野氏によると、一般的に日本人は論理的思考が苦手であり、それは言語によるところが多く、英語などと違って多民族で使うことがないためだそうです。それに対し、英語などは言語そのものが論理的で、曖昧な表現が少ない言語であるとの事でした。また、米国などでは、論理的思考が強いあまり、それを弱める動きもあるそうです。という様な話をまじえながら、研修初日は日本語や日本文化の特性や論理的に物事を考える方法についての講義、そして2人一組での軽い演習を行いました。



岡野講師（中央）とミニディベート優勝チームの方々

研修2日目は、本研修の総まとめとなるディベートが行われました。ディベートの論題は『バレンタインデーはいらない』です。6グループに別れ、それぞれが肯定側・否定側の両方を経験します。まず肯定側の立論、そして否定側の反対尋問、そして否定側の立論…というようにそれぞれのステージ（別表参照）での試合が行われました。決められた時間内で相手の論点に対し、反対尋問や立論を行っていかねばならないため、一時も気が抜けません。また試合に参加しない間は、傍聴人となりそれぞれの論点をメモし採点しなければならぬため、聴くほうも頭をフル稼働させなければなりません。第1試合こそ、慣れないせいもあり、ところどころで講師からの指導を受けながらのディベートでしたが、回を重ねるにつれ白熱した論争が行われました。

参加者それぞれが持っている知識や検索機能をフル活用しながらの内容であったため、最後には疲れも見られましたが、頭のよい運動になったのではないかと思います。

(別表)

セッション	肯定側	否定側
立論・尋問ステージ	①肯定側立論スピーカー 2分 (応答)	②否定側反対尋問 3分 ③否定側立論スピーカー 2分 (応答)
	④肯定側反対尋問 3分	
反駁ステージ	⑥肯定側第1リバトル 1.5分	⑤否定側第1リバトル 1.5分
	⑧肯定側第2リバトル 1.5分	⑦否定側第2リバトル 1.5分
	⑩肯定側第3リバトル 1.5分	⑨否定側第3リバトル 1.5分
総括ステージ	⑫肯定側クローザー 2分	⑪否定側クローザー 2分

【問い合わせ】 マッセ OSAKA 研修課 TEL:06-6920-4567

掲 示 板

* 研修受講者レポート ⑤ *

～平成18年度市町村職員海外研修

「行政とNPOの協働について～地域再生・まちづくりを中心に～」
に参加して～

田尻町事業部都市政策課 田伏 泰久

唐突ながら、辞書によると「協働」という名詞の意味は、「行う」ということで、漢字の意味は、同じ目的のために協力して行うこと、と記されている。

特に最近、行政団体が取扱う書類などは、この「協働」という言葉が、あらゆるところで使われ行政の代表的な単語となっている。正直なところ、私自身も行政職員でありながら日常業務の中のひとつでしかなく、「協働」はまさに業界用語であってあまり深く考えたことがなかった。

しかし、言葉について考えてみると、例えば、対話、尊重、共有、目的、分担、発想、立場、原動力、理解など、多くの関連する単語が想像され、非常に奥深い意味を持つ言葉のように思えた。実際のところ、これらの言葉が関連しているのかどうかは別問題として、私にとってはこの研修を受講する大きなきっかけになったのは確かである。



日本の場合、阪神・淡路大震災以降、ボランティア支援に関する団体が特に増加し、今ではこの活動が日本のNPO制度の基本に近いものと言っても過言ではない。しかし、これら行政側が受ける「協働」のありがちな考え方は、その事業の直接的成果や結果論のみを重要視することが多く、「NPOとの協働」そのものの自体が評価に繋がっている。

今回の研修を受講し、「協働」とは…異なる主体が対等または平等な原理のもとに自主的に築く関係であり、「非同一性」「対等性」「時限性」が基本理念であること、つまり両者が互いに当事者であることを認め合うことが「協働」であって、お互いの変革を前提とした行動原理で、重要なのはそのプロセスであることがわかった。

同時に、先進的な事業展開を行っている実施研修先のアメリカ合衆国、ワシントン州シアトル市においても、直接的成果よりは、むしろその事業実施の過程（プロセス）におけるコミュニティ形成を重要視しているところは、やはり日本と考え方が根幹的に異なっていた。それは結果的に地域住民が力を発揮し、課題の解決を可能にすることが出来ていたことである。

実際のところ、日本の行政では、責任問題を追及することが主眼となってしまいがちなので、なかなか現実問題としては難しいところではあるが…。



とは言え、地域社会、まちづくりを進める上で、今回の研修を受講して大変参考になったのは、「協働」を通じて地域社会のソーシャルエナジー（地域社会・コミュニティの活力）を高めることが大切であり、そのプロセスが行政にとって一番重要であると学んだことである。

皆さんは、「協働」という言葉で実際のところ何を想像されますか？

【問い合わせ】 マッセ OSAKA 研修課 TEL:06-6920-4567

掲 示 板

* 公募論文表彰式を行いました *

マッセ O S A K A 平成18年度公募論文の表彰式が、平成18年12月19日（火）にマッセ O S A K A 5階の特別研修室で行われました。

今年度は合計3編の応募があり、昨年に比べて応募数は減少しておりますが、現場の実態に即した、実務担当者ならではの論文が多く、テーマについてもタイムリーなものであったという高評価でありました。

本年度最優秀論文受賞者は、朴井 晃さん（八尾市職員）「公益法人と市町村～市町村出資財団法人と市町村の今後の関係を構築するための課題整理～」、優秀論文受賞者は、鴨ちゃん和小難しい仲間たち(^_^)v 代表者 山岡 邦章さん（岸和田市職員）「忘れられた青少年へのアプローチ～青少年の居場所と安全・安心のまちのためのひとづくり～」、審査委員特別賞には、坂本恵子さん（池田市職員）「図書館からまちづくりを叫ぶ～小さくても地域に誇れる図書館づくりを目指して～」がそれぞれ選ばれました。

表彰式では、当センターの齊藤所長より、賞状と賞金が手渡されました。表彰式終了後、受賞者のみなさんは齊藤所長と事務局を交えながら、今回、論文を書こうと思ったきっかけや論文執筆にあたって苦労されたことなどを、なごやかな雰囲気の中で談笑されました。

来年度も多くの方からのご応募をお待ちしております。

なお、来年度においては、応募要領を刷新し、新しい公募論文を検討しております。

ふるってご応募くださいませ。



【問い合わせ】 マッセ O S A K A 研究課 TEL:06-6920-4565